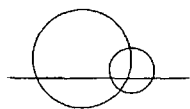


〈東亜同文書院大学記念センター公開講演会〉



ハイコーロ

海格路キャンパスは「借用」か「占拠」か

元霞山会理事長・上海交通大学顧問教授 北川文章

【司会】 皆さんこんにちは。お待たせいたしました。本日は愛知大学東亜同文書院大学記念センターの公開講演会にお集まりいただきましてありがとうございます。今日は大変天気良くて、お休みのところよくお集まりいただきましてお礼を申し上げます。私達東亜同文書院大学記念センターは、今年4年目に入りましたけれども、ここ3～4年、東亜同文書院大学記念センターが持っております資料の公開と、東亜同文書院についての総合的研究というプロジェクトを行なっておりまして、その一環としていろんなところでかなり大規模な展示会と講演会を開いておりますと同時に、この愛知大学豊橋校舎におきましても年4回、公開講演会を開かせていただいている次第でございます。本日はご案内の通り北川文章先生に講演を願いますが、その前にこのプロジェクトのまとめ役と言いますか主任という資格で、本学の藤田先生から一言ご挨拶をお願いしたいと思います。

【藤田】 皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました愛知大学東亜同文書院大学記念センターのセンター長を務めさせていただいております藤田と申します。たびたび来られてる方は何度も顔を見ていただいたり、ご挨拶を聞いていただいていると思うんですけど、ただいま司会の大島先生のほうからご紹介がありましたように、今年で4年目を迎えております文科省がらみのオープン・リサーチ・センターを進めつつあり、来年も

うあと1年ということになってまいりました。毎年恒例のように全国でドサ回りをやってると言いますか、北は弘前から福岡まで、今年は神戸でやりましたけど、それぞれの場所で皆さんに関心を持っていただいて、大変我々としてはありがたく思っております。来年は最後に地元名古屋へ戻って来ようと思いますが、その前にちょっと京都に立ち寄りたいというようなことを考えております。

今日はそういう中、本学で行なわれております講演会の1つとして、大島先生のほうからご幹旋をいただいて北川先生にいらしていただきました。上海時代最後のほう、1937年の第二次上海事変の時に東亜同文書院のキャンパスが焼かれてしまいました。租界の外にあり、当時いろんな条件がございました。焼けたあと、隣にあった上海交通大学（中国で最初にできたもともとの名前は南洋公学という学校で、今も現地に行きますとその大きな額がかかっています）というところをお借りしたことがございました。それが「借用」であったのかどうか、これは当時戦争状態の中でのできごとですからいろんな解釈が成り立つかと思うんですけれども。北川先生は最後の東亜同文書院生でございます。それから愛知大学の卒業生でもございます。こちらにおられる小崎先生も同じように東亜同文書院の卒業生で愛知大学の卒業生でございます。そういう点でいろいろ広く経験され、また当時の様子も生き証人としてご存じの先生で



ございます。

私は北川先生とは、北川先生が霞山会の理事長をやっておられた時に、そういう問題も含めて東亜同文書院と中国側との問題を歴史的事実の上できちんとクリアできないかと、委員会を立ち上げていただき、私が日本からの代表みたいな形になって、向こうの先生方とずっと研究交流をしました。2年前にそのシンポジウムの成果をこちらで皆さん方にも聞いていただきました。その前の年は上海でやはり同じような講演会・シンポジウムを開きました。全て北川先生の非常に熱心な働きかけで実現したものです。そういう意味で東亜同文書院、愛知大学、それから我々記念センターにとっても非常に重要な先生であります。

北川先生は今日の履歴書をご覧になっても分かりますように、あの有名な山一証券というのがございましたけれども、そこの副社長をされた方です。それと本学の理事もしていただいております。本学とも非常に関わりの深い先生であり、上海交通大学の先生としてもご活躍であります。非常にグローバルな視点でものごとを考えられ、私も北川先生とお話をする過程でいつも気が大きくなっていくところがございます、多くの教えや刺激をいただき、感謝しております。今日は戦時中の東亜同文書院大学と、中国側の上海交通大学とのあいだの問題をご紹介いただけるということで楽しみにしております。簡単ですがこれで私の挨拶とさせていただきます。どうぞ最後までごゆっくりとご清聴ください。

【司会】 ありがとうございます。北川先生につきましては今藤田先生から概略ご紹介がありましたけれど、講演に先立ちましてもう一言二言付け加えさせていただきたいと思っております。お配りした略歴をご覧ください。北川先生は1928年（昭和3年）、奈良県でお生まれになりました。したがってお年は80歳を少しお越しになっておられると思っておりますが、お元気でわざわざお出でいただきまし

た。1945年（昭和20年）に東亜同文書院大学に入学されました。最後の46期生であります。この時は多くの入学生が上海に行けなくなって富山県の呉羽で入学するんですが、先生はおじ様の関係があられて上海で入学されました。ご存じのように日本は敗戦に見舞われ、東亜同文書院大学は閉校になっていくわけでありましたが、そのあと日本で東亜同文書院関係の先生が中心になり愛知大学を創立いたします。その時の1947年（昭和22年）、予科2年に転入学されました。旧制大学（1951年まで存続）として入学され、51年に旧制大学を卒業されました。そのあとは山一証券に入社され、順次キャリアアップされまして、最後には副社長にまでおなりになりました。退任後は山一土地建物株式会社の社長になられ、その頃証券の顧問として中国を担当されておりました関係で上海交通大学の顧問教授に迎えられ、同大学でいろいろ証券問題についてご指導をされています。その後1996年霞山会常任理事、そして2002年には同会理事長になられます。霞山会というのはもう皆さんに言うまでもないことだと思いますが、元の東亜同文書の戦後における後身団体であります。霞山倶楽部と言っていた時代もありますけれども、やがて霞山会というふうになります。その理事長になられたわけでございます。したがってご紹介といたしましては元霞山会理事長ということ、それから上海交通大学顧問教授ということで紹介させていただきました。経歴についてはそれぐらいにいたしまして、本日のご講演は「海格路キャンパスは借用か占拠か」というテーマでお願いしたいと思っております。このテーマは非常にいろんな問題を含んでおり、愛知大学でもまだ充分理解しきっておりませんので、その点よろしくお教え願いたいと思っております。では北川先生、よろしくお願いたします。

【北川】 皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました北川でございます。私7年ほど前に脳

2009年11月28日

愛知大学豊橋校舎

元霞山会理事長・上海交通大学顧問教授 北川文彦

ハイコーロ

— 海格路キャンパスは「借用」か「占拠」か —

- 一) はじめに
- 二) 東亜同文書院の交通大学(徐家匯)キャンパスへの移転を巡る諸問題 (別紙参照)
- 三) 伝統とその継承について
- 東亜同文書院をケーススタディー
 - * 書院興学の要旨 (建学の精神)
 - 「中外ノ実学ヲ躰ジテ、中日ノ英才ヲ教エ、一ニハ中国
富強ノ基を樹テ、一ニハ中日輯協ノ根ヲ固ム」
 - 日中戦争以前と以後の様相の変化
 - ・ 中華学生部の存在
 - ・ スポーツ交流等 (1920/9 ~ 1934/3)
 - ・ 書院と他外国系学校との対比
 - 震旦大学(Aurora University)を事例として—
 - 学舎を“上海”においた意義
 - 中国側の評価と日本側教・学生のジレンマ
 - 多様性・特殊性・孤立化への途—
- 四) まとめ

別紙① 当日の北川氏作成レジュメ

梗塞を煩い、多少不便なところがございます、特に発声がうまくまいりません。どうかお聞き苦しい点がございましたらご容赦願いたいと思います。そういうことで声が通じませんと具合が悪いですから、できるだけ前のほうへ詰めていただいたほうが私もしゃべりやすいので、1つよろしく願いいたします。

後ろに貼ってあります上海の交通大学、これには中国語で「海格路」と書いてあります。今上海の地名もいろいろ変わっておりまして、当時の名前が海格路(ハイコーロ・かいかくろ)と言うんですが、今は華山路(ホアシャンロ・かざんろ)と言います。交通大学はちょうど日本で言いますと東京の渋谷ぐらいのところにある大学でございます、従来は理工系の大学でしたけれども、今や中国でも有名な、医学部も含めた国立の総合大学になっております。先ほどもお話がございましたように1937年、日中戦争が始まってまだ1年経つか経たないかの時期に、この交通大学とちよう

どキャンパスが隣り合わせで、距離にして1,000mもないところにごございました東亜同文書院が、日中戦争、続いて上海事変という戦火の中で焼かれまして、同文書院の学生は一時的に長崎に疎開するという状況にあったわけです。交通大学の55,500坪ぐらいある校舎には、戦争による難民が一時15,000人ぐらい収容されておりました。その難民に出てもらいまして、そのあとに同文書院が入って通常の学校生活を始めました。それが1938年で、言うなれば日中戦争が始まった次の年の4月17日に、ここで開校式が行なわれたわけであり

ます。私がなぜこのテーマを取り上げたかと言いますと、東亜同文書院にはちょうど45年の歴史がございまして、昭和20年の終戦と共に閉幕するわけですが、その歴史については、まあお読みになった方もあると思いますがずいぶんいろんな側面があり、卒業生も非常にユニークで多方面にわたっております。小説に書かれた大学というのは早稲田

とか慶応とかございますけれども、おそらく同文書院は45年の歴史の割には一番多いんじゃないかと思えます。それともう1つ、45年の歴史の軌跡を、『東亜同文書院大学大学史』とか、その上部団体の『東亜同文会史』とか、いろいろ歴史の上でもきちんと記録されております。と言いますのは、東亜同文書院は文部省管轄下の日本の大学でございますけれども、同時に珍しく外務省の管轄でもあった。言うなれば外務省と文部省とで共管される特殊な学校であったということもございまして、記録は非常に細かく残っておるわけでございます。

ただ問題は、日中戦争の直後でもあったせいか、交通大学のキャンパスに移った当時の状況が大きなエアポケットになっております。あまり詳細な記録がなく、今残っておりますのは日本側の目線による日本の記録が中心でございます。ちょうど戦争の最中、まだ砲煙消えやらぬ状況でございますから、止むを得なかったということもあるんでしょうけれども、こちらには肝心の交通大学側の記録が無いんでございます。と言うのは当時交通大学は、伝聞では国民党、要するにその当時の中国の国立大学ですから、蒋介石と一緒に重慶へ疎開していたという説も専らでございました。そんな状況の中で日本側では「借用」したと言い、中国側では日本側に「占拠」されたと、こう言ってるわけでございますが、キャンパスの広さは55,500坪ぐらいある膨大なもので、借用したとしますといわゆる通常の貸借の概念から、契約書も何も残っていないはずはないと思うわけであります。

しかしいずれにしましても今から70年も昔のことです。中国との交流もずいぶん長く50年近く途絶しておりましたが、交通大学と同文書院は隣り合わせの立地条件であり、その同文書院の校舎が焼かれたという状況の中で、我々同文書院の関係者には全く交通大学の姿・形が見えてこない。どんな状況の中でどういう形態でこの交通大

学のキャンパスに移ることになったのか。東亜同文書院はその中心の理念に中国との友好ということ掲げております。日中友好から考えても、空白のまま置いておくのはまずいんじゃないかと、私もかねがね思っておりました。おそらく同文書院の関係者は、これは何とかしなきゃいかんなど思ってたはずでございます。たまたま私が先ほどご紹介いただきましたように、交通大学から招聘を受けて金融証券の講義をするようになり、交通大学側の学長を始め先生方とも親しくなりましたので、何とかその当時の資料を出してもらって空白を埋めたいということをお願いしました。

しかし中国も政治的になかなか複雑な側面もございまして、なにかと難儀をしたんでございますが、「それでは日本と中国で歴史研究をやろうじゃないか」ということになりました。先ほどご挨拶がございました藤田先生にも日本側の代表として出ていただき、交通大学と、もちろん他の歴史学者も入りましたけれども共同研究をやる。そうするとその中からいろんな空白だった部分が1つずつ埋まってまいったわけでございます。その話を今日は私がしようと思います。お聞きいただいている皆さんにとっては、七十年も昔の話じゃないか、それも大学の貸し借りの問題じゃないかということで、言うなればミクロの問題でございます。しかしこのミクロの問題を詰めていく形で、当時の日中関係とか、上海の抱えていた問題点というのが幾つか見えてくるわけでございます。私もそういう観点から非常に興味深く自分なりに調べていったわけでございます。

それでは本論のテーマに沿ってお話し申し上げたいと思います。盧溝橋事件というのがございまして、日中戦争（中国語では別の言い方をしますが）が始まりましたのが1937年（昭和12年）のことです。皆さんのお手元にそういう時間的経緯を踏まえた参考資料（別紙②）をお配りしておりますので、それをご覧いただきながら私の話を聞いていただきたいと思っております。今申し上げ

年次	書院の交大徐家匯キャンパスへの移転を巡る主要事項			
	日中政治	東亜同文書院(大学)1901創立	交通大学(南洋公学)1896創立 *盛宣懷	震旦大学(AURORA)1905創立
1937 (昭12)	日中戦争勃発 (7) 第二次上海事変 (8) 第二次国共合作 (9) 首都重慶移転決定 (11) 南京陥落 (12)	近衛東亜同文会会長に組閣大命(6) 長崎仮校舎開院式 (10) 書院虹橋路校舎焼失 (11) 広田外務大臣→岡本上海総領事 東亜同文書院/開校二要素ル経費 二関する件 (12/16) 岡本上海総領事→広田外務大臣 書院/交大跡二開校二要素ル経費 (12/28) 書院開校/為/所要経費概算左の 通り 合計 124,050円	国際難民救済会→{ 鉄道部長 [電] 教育部長 [電] 交大校舎を難民收容に開放方要請(10/28) 教育部長→黎校長 [電] 安全地帯へ即刻退避を (11/2) 交大→教育部 [文] 対応状況等を陳述 (11/8) 郊外校舎へ→中環学芸社・震旦大学へ 再退避(520人) 仏当局も承認	校舎西隣を難民收容所として提供 (2000人收容) 新築講堂を臨時野戦病院に提供 (傷病兵1410人收容) 講堂の一部を交大に貸す 女子文理学院併設 (38年 女子学生募集開始)
1938 (昭13)	第一次近衛声明 (1) 「国民政府を対手とせず」 南京に中華民国 維新政府樹立 (3) 徐州陥落 (5) 武漢・漢口陥落 (10) 汪兆銘 重慶から ハノイに脱出 (12)	広田外務大臣→岡本上海総領事 書院開校の為 (3/1) 交大内難民退去支出承認 海格路交大跡にて書院開校式 (4/17) 大内院長訓旨 『～日支の融合を本旨とする本院 としては、借用することは誠に忍び ざるものがある。～関係方面と協 議懇談、苦慮の結果、ついに止む を得ざるものとして、一時本校舎を 借用することとなった。』 書院38期生入学 (4) 大学昇格準備委員会設置 (12) (大学昇格 1939年12月) (同文書院大学昇格に関する 勅令公布)	黎照寰→教育部長 [文] 環境急変に伴う危機対応策について (2/1) ・校舎 日本側接收可能性 ・保全策として私学化も要検討 交大→教育部 [文] 交大校舎、書院利用等の状況報告 (2/14) 交大校長→漢口教育部長 [電][文] 交大全校舎 敵に占拠される (4/16) 4月17日 書院開校 交大校門扁額→書院の本札に代る 交大校長→漢口教育部長 [文] 交大校舎 同文書院の占用となる (4/19) 教育部長→黎照寰に [文] 教・学生に安心して勉学に努めるよう 説諭を (5/29) ・経費は送金手配した ・流言蜚語に惑わされぬよう ・組織改訂は急がぬよう	※震旦大学の歴史 カトリック系(イエズス会) フランス式教授方式の文・理系大学 としてスタート 中国にナショナリズム台頭でジレンマ 5. 4運動に呼応する学生スト 仏官憲これを鎮圧 退学生65名 (1919) 学生、教育権要求 仏警察介入撤回 (1927) 政府教育基準に改訂 震旦大学と呼称 文型(6)理系(6)医(4)の総合大学となる 中国教育部認可 (1932) この間、財政的にも租界当局支援 1949年 新中国建設 所属宣教師退出 (1952 2/1) 教会・大学の経費支給停止 震旦大学撤収 (1952/10)
1943 (昭18)	1943年 治外法権撤廃 1944年 南京国民政府主席 汪兆銘名古屋で病死 1945年(昭和20年) 延安で中共七全大会 毛沢東 国民党に絶縁状 (4) 米軍 沖縄上陸 (4) 沖繩陥落 (6) 広島、長崎に原爆 (8) ポツダム宣言受諾 (8) 近衛文麿 自殺 (12)	交通大学からの校舎返還要求に対 する同文書院大学本問喜一の書面 (1945 8/27) 本校校舎は(財)東亜同文会が 昭和14年(民国28年)10月1日 に普通敵産処理委員長(日本大 使館事務所)から借用したので、 返還に関しても当該委員会の指示 に従い、日本大使館の命令で返 還する 運輸不能の新入生呉羽分校に (5) 上海居留日本人 (9) 虹口地区に集結 (9) 書院学生・教職員家族 北四川路に集結 (11) 中国軍 海格路校舎接收 (11) 呉羽分校閉鎖決定 書院同文会自発的解散 (1946)	交大→教育部 [文] 交通大学から徐家匯校舎返還要求 (11/5) 貴部が友邦当局と相談し、同文書院が使用 中の当校校舎の返還交渉をお願いする 教育部回答: [文] 既に外交部と共同で処理し、行政院に より調査処理する (1943 12/25) 同文書院からの贈与資金の分配について [文] 同文書院校舎新築計画あるも進展困難 (12/31) 書院は300万円を學術機関に贈与 ※交大分配 75万円 ※國務院上海交通大学 (1959 7/31)	震旦大学医学院 } 合併 聖約翰大学 } 同徳医学院 } → 上海第二医科大学 (現交通大学医学院) 経済系、中文系、化学系、栄養関連 → 復旦大学 法律系 華東法政学院 電機系 上海交通大学 土木系 同濟大学 化工系 華東工学院 教育系 華東師範大学 会計、金融、企業管理 上海財經学院 (震旦大学撤収 1952)

別紙② 当日の北川氏作成年表 (一部補訂)

たように日中戦争は1937年7月に勃発いたしました。それから引き続いてひと月後には第二次上海事変ということになり、戦火は上海に飛び火して、上海が最初の戦場となりました。中国軍と日本軍が激突するわけですが、閘北(ザーペイ・ざほく)という上海の北のほうから、だんだん交通大学や元同文書院のあったほうに、主たる戦場が移って

まいります。表の左側に東亜同文書院関係のことが年次的に書いてございますけれども、同じ年の11月に書院の虹橋路校舎焼失とございます。これは今申し上げた交通大学の真隣にある同文書院の校舎でございます。ここでは1917年から37年までの20年強、自前の校舎として営まれてきたわけでございます。

同文書院の元の校舎は中国軍によって放火され、1つ残らず焼失しました。ということは、先ほど申しましたように主戦場がこの地域に移ってきていたということです。同文書院は当時どうしてたかと言いますと、戦争が激しくなる前に長崎に疎開しておりましたので、焼かれた時には学生達は学校にはいなかったわけでございます。これはどこかに再建しなきゃならないということで、当時の外務省を中心に現地総領事館とのあいだでいろいろ文書の往来等もございました。その当時から交通大学のところへ移ろうじゃないかという流れができてきたわけでございます。その時交通大学の状況はどうだったのかということですが、約55,500坪の膨大なキャンパスに、戦争による難民が15,000人ぐらい収容されておりました。

収容されるに当たってどういういきさつがあったかと言うと、国際難民救済会という上海にあった国際機関が、鉄道部長・教育部長宛に電報を打っています。「難民が急増したから、どうか交通大学の校舎を使わせてもらいたい」と。中国では部長というのは大臣のことで、要するに鉄道大臣と文部大臣宛に電報を送りまして、交通大学の校舎を難民のために空けてもらいたいという電報です。それに対して交通大学側は、そういう状況の中では止むを得ないということで、そこに10月と書いてございますが、学生はちょうど夏休み休暇で空いてたところへ、難民救済会の要請に基づいて15,000人ぐらいの難民が収容されました。そこは非常にフランス租界に近いものですから、フランス側の官憲が守備をするという状況で難民が収容されました。1月になってまた教育部長（文部大臣）から黎校長（交通大学の学長）宛の電報で、どうも戦局が厳しくなって具合が悪いから、学生をすぐ安全地帯へ避難させるようにという指示を出します。先ほど申しましたように、その辺一帯が戦場化したしまして、大学の中にも弾が飛んでくるというような状況だったから、急いでどこか安全地帯へ避難しなさいという命令を出すわけで

す。

それに対して交通大学側は、表には郊外の校舎とありますが、郊外と言うより交通大学のすぐそばの、まあ昔の上海でないとお分かりにならないと思いますが、校門の真ん前にクリークが流れておりまして、その道を隔てたところがフランス租界なのでございます。租界には日本側も手を出さないということから、租界にあった交通大学の校舎へ一部避難して授業をするわけです。ちょうど校門のすぐ真ん前でございます。ほとんど離れてない。その校門から道を隔てた先がフランス租界ですから。そこに直接攻撃されるわけじゃないですけど、流れ弾が飛んでくるわけなんです。これは非常に危険だということで、フランス租界の内部、当時の中華学芸社とか震旦大学の校舎へ移ります。その当時の状況を学長が中国の文部大臣に報告しています。非常に危ないので移りたいんだけど、当初はフランス当局もなかなかOKしなかった。いろいろ折衝の結果、当局も止むを得ないということで、フランス租界内へ移ってくることを認めた。やはりその当時の国際情勢は非常にデリケートで、フランス側もあまり日中戦争の渦中に入りたくないということで、すぐにはOKしなかったように聞いております。

まあそんなことで、今度は同文書院側の項目をご覧くださいと思います。同文書院側はそういういきさつもあって、その翌年の4月17日には交通大学のキャンパスへ入るわけです。そこで問題は、開校式でその当時の院長（その時点では同文書院はまだ大学に昇格しておりませんから）、すなわち学長が訓示をしております。その中で「同文書院は日中の融合を旨とする大学である。だから借用するということは誠に忍び難いけれども、関係方面と協議懇談して、苦慮の結果止むを得ないものとして一時的に交通大学の校舎を借りることにした。だから学生諸君はこれを大事に使って、少しでも壊すようなことがあったらいけませんよ。できるだけ早く借りた校舎を出て自前の校

舎を作るから」と、こういう意味の訓示をしてるわけでございます。

しかし一方交通大学のほうは、こういう状況になってくるといったいどうしたものかと思うわけです。日中の政治関係をご覧いただくと、その頃日本軍は言うなれば破竹の勢いで進撃していくわけですね。それで遂に南京まで行くわけです。その当時の状況は「勝った、勝った」で、南京陥落の提灯行列をやるというような状況でございました。交通大学のキャンパスは4月17日に日本側による開校式が行なわれるのですが、その前の日に、これもまた交通大学の学長から文部大臣宛に「大変なことになった」と。「今まで交通大学の校門に掲げてた扁額は外されて、東亜同文書院の額に掛け換えられた」。これは原文をそのまま訳したんですが、「敵に占拠された」と、電報も書面も送っております。その時交通大学が出してる先は、漢口の教育部長宛です。ですから重慶まで行っていないんですね。日本軍は最後重慶まで中国を追い詰めますけれども、その当時は南京が陥落した直後でございますから、まだ教育部は漢口に残ってたわけですね。だから漢口の教育部長（文部大臣）宛に状況報告をしてるわけでございます。それを事細かに読んでいきますと、面白いことが出てまいります。

その状況の中で例の汪兆銘政権が登場するわけでございます。もう1度日中関係の欄をご覧いただきますと、1938年の1月に当時の近衛内閣が第1次の近衛声明、有名な「国民政府を対^{あいて}手にせず」という声明を出すわけです。一方汪兆銘政権が樹立される。そうするとともに交通大学は国民党政府が作った大学であり、その当時は国民政府の中国でありましたから、その国立大学であります。そこへ持ってきて汪兆銘政権が登場すると文部省が2つできちゃうわけですね。汪兆銘政権の文部省と国民党の文部省と。学長としてはどっちの言うことを聞いていいのか分からないということで非常に苦しみます。交通大学が国立のまま

いると学長も国民党政府から任命されてるわけだから、自分は執行権限を奪われてしまう。今後どうしたものか。いっそのこと国立大学をやめて私立大学になったらどうかということ、国民党の文部大臣宛に、校長職でなく個人名義の手紙で相談してるんですね。面白いのは、この意見は誰からサジェスションを受けたかと言うと、フランス側からだと言うんですね。「国立の大学だったら日本と中国とは戦争してるから奪われても仕方がない。しかし私立の大学であれば、日本政府も国立の大学を取るようにはいかないだろう。だから私立の大学にしたらどうか」ということをフランス政府（租界当局）がサジェスションして、「こういうふうに言われてるんだけどどうしましょうか」と文部大臣に相談してる。そういう局面もあったわけです。

一覧表（別紙②）の右端に震旦大学というのが出てまいります。これはちょうど同文書院と同じぐらいの1900年代初め、1905年にできたフランスの大学でございます。交通大学はその一部の校舎を借りて疎開するんですが、1930年当時の状況を振り返ってみますと、当時上海にあったキリスト教系の大学というのは、今度は中国側から非常に弾圧を受けるんですね。もちろんキリスト教へのいろんな弾圧というのは清朝時代から続いておりますけれども、30年代（昭和の初め頃）の上海にも、基本的にキリスト教という看板の名目で中国を侵略するから排除すべきだ、というような動きがあったわけです。震旦大学もフランス系のカトリックの大学でございますから、30年代には同じように非常に厳しい制約を受けるわけです。しかし便法として、震旦大学は中国の文部省の制度に従いますからということで、日中戦争が終わる直前ぐらいにはもう中国の文部省のルールに従って、交通大学とも非常に仲の良い大学になってたわけです。震旦大学（オーロラ大学）はフランス租界の中心にございましたから、交通大学の学生はそちらに避難しておりました。



上海にはこの震旦大学以外にもアメリカ系のセントジョン大学とか、幾つかございました。そういうところにも交通大学の学生が移っていったわけでございます。そんな状況の中で同文書院は交通大学に移りまして、それから約7年経って、同文書院は1945年の日本の終戦と共に45年の歴史を閉じるんでございますけれども、それまでの状況は今申し上げたようなことでございました。結局その7年間に1,500名程度がこの交通大学で起居を共にし、勉学に励みました。借用したのか占拠したのかはともかくとして、交通大学で終戦まで過ごしたということになります。その間に同文書院は大学に昇格いたしました。その当時のオーロラ大学とかセントジョン大学とか、キリスト教系の大学はどうなったか。終戦直前に上海の租界は無くなり、キリスト教系の大学も戦後新中国ができまして宣教師は全部追放になったということもありまして、幾つかあった外国系の大学はすべて消滅いたしました。校名が残っているのは同済大学のみ、同校も土木を中心とする国立大学に変わっております。今上海には国・市・私立を合わせて50ほどの大学と短大があると聞いていますが、外国系の大学が抱えていた学部は分解され、これらの大学それぞれに吸収されているようです。一応ここまで、交通大学に移る時の顛末についてお話し申し上げました。また続いてお話しするつもりですが、一応ここまででご質問がありましたら承りたいと思います。

【司会】 どうでしょうか。非常に複雑な過程でございますので、分かりづらいところがございましたらどうぞ質問してください。ございませんか。では先生続けていただきまして、最後にまとめて。

【北川】 はい。それじゃあ続けさせていただきます。全然次元の違う話を申し上げるわけですが、伝統とはそもそも何なのか。私は伝統を続けていくということは非常に難しい問題だなというふう

に思っております。特に東亜同文書院というのはどういう大学なのか。日本の文部省の制度の下にある日本の大学でありますけれども、文部省だけじゃなく外務省からも共管を受けるという特殊な形をとっている。いわゆる満州事変以降、中国の大連にも満州にも日本の大学があったことはご案内だと思います。旧領土と言いますか朝鮮(韓国)にも、台湾にも、それぞれ帝国大学がございました。しかし同文書院は古くからあって上海に立地していたという特異な側面を持っております。同文書院の伝統はどのようなふうに続けていくのか。形の上ではいろいろ愛知大学にも継承されております。こうやって私がここでお話しいたしますのも、同文書院の関係者として、また愛大の卒業生として、1つの繋がりがあるご縁でお話しするつもりです。しかし一般論として私は、伝統を継承するという事は非常に難しいなと思っております。特に同文書院の場合はいろんな切り口を持っている。卒業生の顔ぶれを見ましても、右翼の人もおりますし、左翼もおります。実業家や外交官になった人もいます。いろんなところで活躍してる。共通項があるとするなら中国ということですか。それは上海にあったからです。レジュメ(別紙①)にも書いておりますように同文書院の建学の精神に「中外の実学を講じて中日の英才を教え、中国富強の基を樹て、中日輯協の根を固む」と書いてあります。中日輯協とは中日友好ということですか。日本の大学でそういうふうに他の国との友好を建学の理念に掲げるところは無いと私は思います。それを実現するためにいろんな苦難を乗り越えて上海にあったんだらうと思っております。

東亜同文書院は結局1901年から1945年まで45年間の、短いと言えば短い歴史を閉じます。日中戦争が始まってから大学に昇格するんですけども、その間に4,700人ぐらいの人が卒業し、その3分の1ぐらいの約1,700名が交通大学のキャンパスで勉強しています。今どれだけの人間が生

きてるかと言いますと、だいたい500人ぐらいじゃないかと思えます。かく申し上げる私が今年でもう81を過ぎました。私は最後の入学生ですから、私より若い人は1人もいないわけです。5,000人近く卒業生があって、生き残ってるのは500人ぐらい。その人達は戦後日本へ帰ってまいりまして、どこかの大学に進学しなくちゃいけないということで、私も1、2日本の学校に移りましたが、結局また愛大へ来て、卒業したのは愛大です。私が愛大に入りました頃は同文書院の同期の連中もいましたけれども、ほとんどがいろんなところから来た連中でした。たとえば京城帝大から来た連中もいましたし、台北から来た連中もいました。私がある時思いましたのは、その顔ぶれを見ると1遍どこかへ移ってるんですね。移ってるけどまた愛大へ来て。そういう連中が多かったですね。何が良いのか、何が他の大学と違うのか。私は今にして思うんですが、同文書院は上海、建国大学は満州と、それぞれ土地が違います。やはり日本に無い風土の中で育まれたものは特殊なものがあるんじゃないかなという感じがします。言うなれば複合された文化というもので、それが愛大の居心地が良かった原因じゃないかなと私は思ったんです。

まあ愛大の話は今日の本筋ではございませんから、同文書院の話の続けてまいりたいと思えます。先ほど来申し上げておりますように、同文書院のありよう、またその母体である東亜同文会のありようは、日中戦争の前と後では大きく違ってると思えます。やはり日中戦争が同文会にとっても大きな分岐点であり、その時の対応がその後の日中関係を左右していった。同文書院も日中戦争の前と後、要するに交通大学へ移る前と後ではやっぱり様相が違う。その中で何が一番の問題点かと言いますと、同文書院はたまたま交通大学のキャンパスに移ってから、他との交流がとれなくなってきたということです。1920年から1934年まで、この間には同文書院の中に中華学生部というのがご

ざいまして、中国人の学生と一緒にいたわけです。先ほど申しました同文書院の建学の精神の中にもございますように、「中日の英才を教える」ということで、中国人と日本人と一緒に勉強できた。全寮制ですから「同じ釜の飯」を食って、肌で中国の文化を吸収することができた。しかし交通大学に移るちょっと前ぐらいからは日中間が険しくなり、中華部の学生がいなくなった。またその前の1933年には中華部の学生が中心になって左翼運動をやっておりましてから、あとで共産党に入る連中もたくさんいた。そういう状況の中で、33年当時は上海に領事館警察というのがございました。日本人の学生も同調して左翼運動をやったということで、治安維持法で検挙されるというような場面もございました。

そんなこともありまして、大学の方針としてもやはり中国人の学生を入れるということは学校の運営上やりにくいということもあったんでしょう。結局中国人との共学は無くなり、日本人だけになってしまった。1920年から1934年ぐらいまでの間は交通大学と隣り合わせだから、一緒に運動会をやったり、卓球の試合をやったり、震旦大学ともいろいろ交流したりということで、上海においては本当に意味のある交流が行なわれていた。それが、まあこれは戦争のなせるわざかも知れませんが、結局日本人だけの日本の学校を運営せざるを得なくなっちゃった。ということで、ちょうど日中戦争勃発の直後に交通大学へ移転したわけでございます。日中戦争が大きな学校運営上の分水嶺でもあったと思っております。同文書院で育った連中は1つの文化を持ってまいりました。その文化にいろんなファクターが融合して培養され、また独特の文化ができてくる。伝統と言ってもいいかもしれません。交通大学側に移ってからまだ先輩の影響というのがございましたので、そのいわゆるDNAは完全に引き継ぐことができたと思います。しかしそれがいったん遮断され、日本へ帰ってきて仮に違う学校を作りましても、



なかなかそういう文化を継承するというのは難しいんじゃないかなというふうに思っております。

同文書院と関連があるのは愛知大学でございます。愛知大学はこうやってセンターも作ってそれなりに運営されてる。それは非常に結構なことです。同文書院は私の母校であり、愛知大学も私の母校ですので、私は卒業生の1人として母校がますます成長することを願ってるわけでございますけれども、単純な継承は無理なのではないかと思えます。伝統を活かすということは、今日的な状況の中で、今日的にそれを活かしていくことで、「なぞる」ことではないというふうに思っております。DNAが違うんですから。まして愛知大学は創立して64年ですか、同文書院より20年ぐらい長く生きて、今日的に立派な文系の総合大学になったんですから、経験を継承するということは大いに結構だと思うけれども、独自の方向で構築して新しい道を歩んでいってもらいたいなと思ってるわけでございます。

まだまだ話し足りないことがたくさんあるかと思えますけれども、私の話はもう70年前のことで、舞台が上海でもございますので、ご理解しにくかったことがたくさんあるかと思えます。あとはご質問を承りたいと思えます。

【司会】 ありがとうございます。それでは質問に入らせていただきます。所属とお名前をおっしゃってからお願いします。はいどうぞ。

【山下】 本日はどうもありがとうございました。私はこの大学の卒業生ではないんですが、名城大学の卒業生で山下といいます。子供がこちらの大学でお世話になりました。三好の名古屋校舎ですけども。中国には13回ばかり行きました。上海には6回行って、今年を除いて過去5回、今お話に出ました交通大学の前でバスを停めてガイドさんがいろんな案内をしてくれるんです。もちろん乗ってるのは日本人ばかりです。10年ほど前にな

りますが5回目に行きました時、何回も同じガイドさんに会ったもんですから、1度大学の構内で写真を撮らせてほしいとお願いして、許可を取って入れてもらった。その間に、現在はこういう歴史の中で、亡くなった元首相の周恩来が卒業した南開大学にこちらの現代中国学部が校舎を建てたり交流してみえて、その関係がよく分からなかったものですから、中に入って30分間ということで写真を撮って、交通大学の事務局で通訳の人に私が聞くことを通訳してもらったんですね。その時反日と言うか対応がものすごく悪かったので疑問だったんですが、今日お話を聞いてやっとよく分かりました。講師の方は前理事長をなさってみえるんですけれども、1901年から45年と言うと45回しかないのにどうして46期生なんですか。そこがちょっと疑問だったのと、現在はこの上海交通大学と愛知大学との交流は全く無いものなんですか。その2つだけちょっと教えてください。

【北川】 同文書院は1901年の創立でございますね。それで同文書院が無くなりますのが終戦の45年ですね。45年の歴史は結局学生が就学した歴史だと思っておりますけれども、それが45年じゃないかなと私は理解してるんですが。46年とはあまり言わないと思うんですが。小崎さんどうでしょうか。たいてい一般に45年の歴史と。

【山下】 46期と書いてあったから。

【小崎】 46期ですね。

【北川】 私は昭和20年に入りまして、期数から言うと46期なんですが、同文書院の校門をくぐってから出るまで実質的には3~4か月しかございませんでした。3~4か月だけで書院生と言えるのかなと自分では忸怩たるものがありますけれども、しかしいたことは事実なんです。入学した

ら何期生と呼びますからね。だから20年に入学したのが46期です。

【藤田】 少し助け船を。書院が大学へ昇格する時に、それまでの東亜同文書院時代の学生の4年生が全員すぐ卒業したら何の問題もなかったんですけど、今流に言うと、当時は単位制じゃないけどまあ少し留年生がいたんですね。その人はどうしてもその年に卒業できないもんですから、もう1年余分に彼等のために作った。彼等は39期生なんです。新制予科に入ってきた時は40からスタートした。それで1年余分になっちゃった。そういうことだと思います。

【北川】 すみません。私はあまり厳密に考えたことがないもんですから。もう1つは何とおっしゃったのですかね。

【山下】 上海交通大学の、雰囲気あまり感じが良くなかったもんですから。それと今、南開大学に愛知大学の拠点が置いてあるわけですね。その関係はどんなふうになってるのかなと。どうしてそっちのほうに縁ができたのかなと思ったもんですから。

【北川】 それは私より藤田先生に聞いたほうが。

【藤田】 ついでに集中会議で言いますと、東亜同文書院時代に『華日大辞典』というのを作る予定でずっと編集作業をやってたんですね。カードが14万枚ぐらい溜まったところで引き揚げざるを得なくなって、カードを持ってこられなかった。戦後になって本間院長（学長）は周恩来首相等に対して、我々の手で作りたいからカードを返して下さいという要望書を送られたんです。親日家の周恩来首相の下、郭沫若氏等の斡旋で14万枚がこちらに返され、それがベースになって『中日大辞典』が作られた。周恩来首相に非常に恩を受けたから

というので、第1号として周恩来首相の出た南開大学と提携したわけです。交通大学と我々の学校との関係はいわゆる友好大学という形になってますけれども、他の人民大学や南開大学との非常に密接な関係よりはちょっと落ちています。だから数年前から北川先生が、交通大学・霞山会・愛知大学の連携をもう少し密にやっとうと非常に努力されて、今その延長上にあるということですね。

【山下】 よく分かりました。

【司会】 その他何かご質問ございませんか。今日のお話が非常に重要なのは、特に愛知大学にとっても重要なことですが、私の働いておりました経済学部の同僚蔣先生からこういうことをお聞きしたことがあります。今の佐藤学長がまだ学長でなかった頃、ゼミ生を連れて交通大学を見学されたんです。その時蔣さんが通訳されたんですが、そこで掲示されている文面に「1938年4月から東亜同文書院大学はこの地を占拠し、そして勝手にいろいろ校舎を改造した」とあった。佐藤教授（当時）が「私達は交通大学から借用したというふうに聞いている」と言いましたところ、説明していた中国人が非常にいぶかしい顔をして不機嫌になり、「そんなことがどうして言えるんですか」と。同じようなことをこちらの越知研究員が行かれた時にも感じられたんでありますが、我々は『東亜同文書院大学史』等の文献により、中国側との平和的交渉の結果「借用」したみたいな印象を持った。実は我々も思い違いをしていて、いろいろなものを詳しく読みますと、『東亜同文書院大学史』にも、あるいは霞山会が出しております『東亜同文会史』にも、そうでないところが出てくるんです。要するに東亜同文会つまり東亜同文書院は、そこを占拠した日本軍と外務省から借用したのであります。交通大学の側からしますとレジュメにもあります通り「交大全校舎敵に占拠さる」というふう

に校長先生は向こうの文部大臣に通告しているわけですから。それでこういう問題が出てくるわけでございまして、その点に今日は触れられた。これが非常に重要なポイントであったと思います。今日の講演の1つの中心はそういうことではなかったかと思うんですが、皆さんお分かりいただけましたでしょうか。その問題、あるいは他の問題をめぐりまして何かご質問はございませんか。

【北川】 少し言い足りなかったことを補足させていただきますと、違う文化の国の人とのあいだで、同文書院の関係者は非常に多様な人が育っております。先ほど申しましたように右翼もいれば左翼もいる。しかし共通項としてあるのは中国志向なんですね。そのありようの根底にあるのは中国なんです。書院生に共通する善意というものを感じてと思うんです。この善意の問題についてお話ししたいと思います。1つは自分達が中国と友好をやろうとしてるのは、もともと建学以来の伝統であるし理念である。そのつもりで対応してる。そう思っているけれども、中国側から見るとその善意が非常に独善的であったり、目線が違いますよということになるんです。先ほど言った交通大学への移転の問題も、中国側から見ると「占拠」であるし、そこで学んだ1,700名近い日本の学生はみんな「借用」したということで、本来ならばもっと疑念を持っていいんですが、そこへは思い至らない。みんな優秀な学生なんだけど、やはり借りたものだという認識はおそらく共通してると思うんです。交通大学と書院との人的往来は、戦中戦後を通じて50年ほどの空白がございます。空白の中でその善意のありようが、やはりある時は独善的であったり、ある時は書院生の中にも交通大学への移転の実態を聞いていて、非常に贖罪的に感じてる人もいます。大変悪いことをしたと。普通一般の日本にいる人達よりも贖罪的に、何とかしなきゃいかんというふうに感じてる。

何人かの人はニュースにもなっております。た

とえばこれは新聞に載ってるから言いますけれども、東北大学の教授をやった菅野さんという人がいて、この人は東北大学で教鞭をとって定年になった。退官する時に退職金の全てを注ぎ込んで中国人のための寮を作った。実は私、ひと月ほど前にその奥さんから、学友を通じて電話をもらいました。奥さん曰く「自分は80歳近くになって子供もいない。何とか夫の遺志を継ぎたいと思うけど、良い方法はないだろうか」と。魯迅が仙台の学校にいたので江沢民が仙台を訪問した時、菅野さんもその宴席に呼ばれた。その時「自分は誠に申し訳ないことをした」と。中国語で「バオチェン」と言いますが「申し訳なかった」と涙を流して江沢民に謝ったと。おそらくそう言われた江沢民のほうはキョトンとしたんじゃないかと思うけれども、心底その人はそう思ったんじゃないですか。それで江沢民と会った翌朝だったかに亡くなるんですけれども。私はたまたま菅野さんの話を出しましたが、そういうふうに物事を極めて贖罪的に考えてる人をそれ以外にも何人が存じております。その反面全く無関心な人もいますし。

要するに「借用」という一見非現実なことを、「そういうこともあるんだろうな」というふうに理解するような、書院生に共通する善意があるんです。それを善意と呼んでいいのかどうか分かりませんが、自分達は日中のために基本的に良いことをしてるんだという気持ちがあるんですね。だから日中間に問題があるとすれば、やはり相手の目線で物を見、相手の立場になって物を考えることが大事で、「こんなことが分からないはずはない」ということが、相手にとっては分からないことなんで、その辺の難しさというのがあるように私は思います。

【司会】 他にご意見あるいはご質問ございませんか。どうぞ。

【藤田】 「借用」の問題をめぐって北川先生のご

意見を非常に興味深く伺いました。プリントのほうはもう1枚残ってたように思うんですけど、その辺のところはなかったのは、あとは文章を見ておく、ということだろうと思いますけれども。交通大学の方々とのやりとりの中で北川先生にいろいろセットしていただきました。やはり向こうの方々も異口同音に言われるのは、1937年以降はそういう「借用」の問題があった。しかしそれ以前は非常に友好的で平和的で何の問題もないというふうにおっしゃるんですね。長い書院の歴史の中で、大多数は平和でうまくいったと。書院の学生達と交通大学の学生達はかなり一緒になっていろんな組織を作ったし、いろんな運動をやったし、交通大学の学生が書院の運動会を見にきたりしたこともあった。しかし満州事変以降ぐらいから中華学生部の学生達も書院に対する反発等があって少しずつ抜けていってしまった。満州事変の頃はまだそう大きな問題はなかったけれども、長い書院の歴史の中で1937年以降の「借用」の問題だけが残った課題だと思うんですね。だから書院の歴史をもう1回、37年以前に戻って勉強しましょうというような話が研究会の組織の中にあっただろうかと思っております。

この辺のところは時代の変化の中で評価がいろいろ違うかと思いますが、私が今日一番感じたのは、やはり37年以降の書院が日本人だけの社会になってしまったと言うか、その辺が一番経営としては大きな問題だったんだらうなと。今日おっしゃった文化の問題もそういう意味で言いますと非常によく分かる気がします。私は古くからの卒業生の人達との面接をずっとやってきたんですけど、その方々が書院の全体のイメージを持つ時に、やはり1937年以降は違うと言いますか、そこは書院ではないというような意見を言う方が非常に多かった。中国側にとっても日本側にとっても37年というのは非常に不幸な年であった。その背景には第二次上海事変があったし、日中戦争が始まったことがあったんだらうかと思っています。

ただ戦後間もない頃はさっきの周恩来じゃないですけどけっこう書院に対してもある程度理解があって、私もここへ来て最初の頃学生達を連れて交通大学へ行きましたけど、そんなに反日的でも何でもなくて、むしろ歓迎していただいた。書院の卒業生の人達もある時代までは歓迎されたというようなことを聞いておりますので、やはり政治体制の変化の中の問題も少しきつく利いてきてるところがあるかなと思ったりします。まあ最近上海で出た本等を見ましても、東亜同文書院は日本の一番優れた秀才が集まる学校だというような形で紹介してしまっていて、そういう意味で言いますと見方が今までとはちょっと違ったりしています。私も書院の人達の旅行記をずっと読んでいく中で、たとえば辛亥革命の時に漢口で事件が起こるんですけど、旅行中の2班がそこに紛れ込んでしまった。両方捕まっちゃうわけですけども、東亜同文書院の学生だということが分かった途端に2チーム共敬意を表して釈放してくれた。1911年ですからだいぶ前の話なんですけどね。そういうような対応の仕方もあったし、どの情報を取るかによっていろいろ見方が違ってしまいうところもあります。まあ大きな動きとしては37年以降の問題、これに関しては北川先生が一番ご苦労をされてこれまでやってこられた問題だと思います。このあたりの問題はすぐにはきちんとケリはつかないんだらうかと思いますが、最後におっしゃったように、お互い相手の目線と言いますか、その立場も理解しながら見ていく必要があるのかなというふうに思っております。そういう点で私としても今日の北川先生のお話は、いろいろ刺激的で参考になり、ありがたいと思っております。ということでコメントみたいになりましたけど終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

【司会】 何かもう締めくくりをしていただきましたようで。時間もそろそろまいりましたのでこれで終わらせていただきたいと思いますが、どうし

でもこの際にというご質問が何かございますか。はいどうぞ。

【劉】 こんにちは。愛知大学現代中国学部の劉伯林と申します。13年前に中国北京から愛知大学にまいりまして、今、現代中国学部で教鞭をとっております。先ほど北川先生のお話をいろいろ聞かせていただいて本当に感銘いたしました。相手の目線で物を見る。日中両国がやはりお互いにそういう姿勢をとらなければいけないと思います。日本のマスコミは「中国国内では若者に反日教育をしている」と騒いでいますが、中国では日本のマスコミをいろいろ見て、この十数年国民感情がかなり悪くなっているのを私は肌で感じております。先ほどの交通大学が借用か占拠かという話になりますと、私が交通大学へ行った時いろいろ聞いた話では、当時どういふに日本の人が交通大学に入ったかと言うと、日本の憲兵が来て交通大学の人達を追い出したということです。でも日本では借用と言います。借用だったらやっぱりいろいろ借用の手続きをするべきだと思います。今のところそういうことははっきり言えないですけども。近現代になって日本と中国との関係がいろいろ複雑になってることが多いですが、本当に相手の目線で物を見れば、日中関係はこんなにギクシャクしないと思います。これから私も先生のおっしゃった方法が続けて、日中友好・中日友好を続けてまいりたいと思います。どうもありがとうございました。

【司会】 ありがとうございます。先生何かそれに対してお答えになることはございますか。

【北川】 非常に心強い話を聞かしていただいて。新中国になって60周年を迎え、今の中国は世界の大国になりましたね。私は経済が専門ですから、そういう角度から中国を見ておりますけれども。しかし経済問題に関わらず、やはり中国を含めて

アジア全体の中心的役割は中国だと思うんですよ。もう好むと好まざるとに関わらず両国が一緒にやっついていかなきゃいかん。そりゃあ問題はいろいろあると思うんです。無いのが不思議なんで、夫婦だって喧嘩するんですからね。だからいくら一衣帯水の距離感であっても、それはいろいろ問題が起きるのは当たり前。ただやはり相手の目線で、相手の立場になって物を考え、お互いに協調していくこと。同文書院の綱領の中に「中日輯協」というのがあります。面白いのは、日本の学校は「日中」と日本を先に言いますが、同文書院の綱領では「中日」になっています。一時私は「輯協」という言葉がよく分からなくて、中国語なのか日本語なのか。要するにお互い協同し合うということだろうと思うんです。これはやっぱり非常に肝要なことで、中国がその存在感を高めれば高めるほど両者間が協調していかなきゃいかんと思っております。

【司会】 ありがとうございます。それでは長時間にわたりましたが講演会と討論をこれで終わらせていただきたいと思います。皆さんの拍手をもって北川先生をお送りしたいと思いますのでよろしく願います。どうもありがとうございました。

〔編注〕

講演後北川氏より「参考にしてほしい」と、以下の二つの資料が送られてきたので掲載する。資料①は1938年2月14日付の、交通大学から教育部に宛てられた状況報告であり、資料②は終戦直後にあたる1945年8月27日付の、東亜同文書院大学長本間喜一より交通大学長に宛てた書翰（返書）である。

資料① 上海交通大学の状況報告（1938年2月14日。原文一部改訂）

交通大学の概況

民国26年（1937-昭和12-）8月13日の上海での戦争（第二次上海事変）勃発の時、本校はまだ元の住所にて校務を行っていた。そのときはまだ夏休み期間中だったので、学生達は学校にいなかった。その後何回か教育部から授業再開準備を進めるようとの命令を受けた。それで10月11日に校外の宿舍で授業を再開した。先に再開されたのが三・四年の二クラスだが、直後に戦局の影響で（上海西部に移った）校外宿舍も安全ではなくなったため、フランス租界にある中華学芸社の建物を借用し、授業及び宿泊に使う。11月5日まで一・二年の二クラスをも再開し、教室は震旦大学と相談して借用した。その時に学校にいた教員は130名、職員は79名、在学学生375名、新入生102名、借読^{ていどく}生89名。第1学期終わりの時点で、学校にいる学生総数は565人、学内の書類ファイル、帳簿類、図書、実験用の各種の器具及び運搬できる機器を統々と運び出した。フランス租界の借りた場所に保管しているが、未だに一部の物品及び運搬できない機器が交通大学のキャンパスに残っている。第1学期の期末試験は今年2月5日に終わった。第2学期の入学登録手続きは6日から12日までの間に行い、14日に新学期の授業が再開される予定。実験室については、機械、電機両学部生のために中法工学院及び震旦大学のものを借りる。現在の教員数は135人いるが、授業のためにまた数名を新しく採用する。職員人数が69名で、12日まで登録手続きを済ませた学生数が387名。まだ登録手続き期間中だし、学費納入不能が原因で入学手続きを完了していない学生も多いため、最終的な登録人数については改めて報告する。本校の校舎が去年10月に国際救済会に第5難民収容所として貸したが、去年12月30日に日本軍憲兵隊が進駐し、徐家匯憲兵分駐所を設立した。現在ではすでに難民を何組かに分けて帰郷させた。同文書院をそこに置く^{おき}と聞いたが、実際に占拠するようである。本校の毎月の経費については、去年10月分までしか受領しておらず、すでに底を尽き、運営維持することがとても困難である。また、本校の事務室は本校校外宿舍に置かれているため、万が一のとき、下記宛先に送金してほしい。上海法租界姚主教路樹德坊3弄21号張延金（本校工学院院長）。

i) 〔借読〕jièdú 旧時、学校の移転あるいは交通の関係などで、甲の学校の学生を乙の学校に依託して学業を履修させたこと。

資料② 交通大学による校舎返還要求に対する同文書院大学長本間喜一の書面での返事（1945年8月27日）

8月21日のお手紙を拝読した。貴校代表による校舎返還要求も承知した。本校校舎は、財団法人東亜同文会が昭和14年（民国28年）10月1日に普通財産処理委員長（日本大使館事務所）から借用したので、（返還に関しても）当該委員会の指示の下行う。本校は当該委員会の指示に従い、日本大使館の命令で校舎を返還するが、下記の手続きが必要である。

- 一、貴校の要請で貴国政府により校舎を接收
- 二、貴国政府による日本大使館事務所との交渉
- 三、日本国大使館事務所命令による本校の返還

本校も返還の準備を進めているが、貴校も迅速に上記手続きを踏んで対応すれば、接收が早く片付く。

愛知大学東亜同文書院大学記念センター | 公開講演会 |

東亜同文書院大学の上海交通大学への移転 —— 海格路キャンパスは 「借用」か「占拠」か ——

日時 2009年11月28日(土) 14:00~16:00

会場 愛知大学豊橋校舎 研究館1階1・2会議室
※豊橋鉄道渥美線「愛知大学前」駅 下車すぐ

講師 北川文章氏
元霞山会理事長・現上海交通大学客員教授
(東亜同文書院大学46期生・愛知大学昭和26年卒業)



東亜同文書院大学は、昭和20年大戦の終結と共に他律的不可避的に45年の幕を閉じた。それ以前に大学史上のハイライトを求めるならば、昭和14年の大学昇格となる。その舞台となり終末まで実質母校であり続けたのが海格路キャンパスである。この新校舎への移転を巡る諸問題—借用とされているか?相手は国立大学、教育部の対応は?当時、交通大学本体は重慶に疎開中?—これらは全て伝聞もしくは、大学史等の資料に基づく。当時の流動的日中間の政治環境、租界の存在等が、問題を複雑にしていたことは否めない。何れにせよ実態があまりにも不明確である。幸い近頃、交通大学の協力で新たな資料を提供され、不透明部分も明らかになりつつある。あらためてこの問題を取りあげ、自分なりの考察を加えたい。

入場無料 どなたでも自由にご参加ください。



愛知大学東亜同文書院大学記念センター/オープン・リサーチ・センター

〒441-8522 愛知県豊橋市岡崎町1-1 TEL (0532) 47-4139 FAX (0532) 47-4196

愛知大学豊橋研究支援課 E-mail:tshien@ml.aichi-u.ac.jp